

第10章 転向派に対する集団間差別行動

第10章では、集団成員性の変化の問題の中でも、集団成員性を変化させた他者、すなわち、転向派に対し、少数派および多数派がどのような行動を示すのか、という問題に焦点を当てる。研究7では、転向派が態度を変化させなかった人々に比べ差別されるのか否かを確かめる。さらに、研究8では、転向によって少数派—多数派の集団サイズの格差が変化することが、転向派に対する集団間差別行動に及ぼす影響を検討する。

10.1 転向派に対する集団間差別行動【研究7】⁶

これまでの研究では、社会的カテゴリーの性質上の違いをふまえ、少数派—多数派という格差の見られる集団間関係で、集団間行動を検討してきた。以後の章では、少数派と多数派の集団間関係に、さらに集団成員性の変化というダイナミクスを組み込む。すなわち、社会的態度や価値観など価値性に基づく社会的カテゴリーでは、個人が属する社会的カテゴリーは主体的に選択するものである。それゆえに、個人の自由意志に従って所属する社会的カテゴリーを変更することができる。このことは、社会的アイデンティティの意識化ならびに集団間行動の様相にも大きな影響を及ぼす。すなわち、所属集団の変更が可能であれば、(特に、好ましい)外集団に移動することによってポジティブな社会的アイデンティティおよび自尊心を得ることができる場合もある。そのとき、集団成員は、現在の内集団に対する同一視を弱め、内集団びいき—外集団差別という集

⁶ 吉田富二雄・久保田健市 1994 社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動 心理学研究, 65, 346-354. (実験3)

団間行動が見られなくなると予測される(Ellemers, 1993; Tajfel & Turner, 1979). 逆に言えば, 集団間の移行が不可能な場合では, 内集団との同一視や集団間差別は示されやすいと考えられる. それだけではなく, 集団成員性の変化は, 社会的カテゴリーの持つ勢力や優位性, および, 価値の正当性を変化させ, 集団間関係に直接的な影響を及ぼす重要な問題であるといえる.

この章では, 集団成員性の変化の問題の中でも, 集団成員性を変化させた他者, すなわち, 転向派に対しどのような行動を示すのか, という問題に焦点を当てる. 転向派は, 「以前内集団であったが, 現在は外集団である」あるいは「以前は外集団であったが, 新しく内集団に加入した」人々である. 一般の集団成員にとって, 転向派は一時的に同じ社会的アイデンティティを共有し, 彼らの社会的アイデンティティはあいまいである. 転向派に対する集団間行動の検討は, 最小条件集団パラダイムにおいて信念適合性理論(類似性—魅力理論)を検証することにもつながる. すなわち, 現実の社会的カテゴリーは, 常に何らかの価値性や属性を伴っており, 共通の価値性や属性を持つか否かという意味で, 類似性が社会的カテゴリーに付与されている. したがって, 一般に社会的カテゴリー化と類似性の要因を分離することは極めて難しく, 同じ内集団成員というだけで何らかの類似性の要因が付与される. そのため, 最小条件集団状況でも, 個人の類似性によって, 内集団びいき—外集団差別を説明する立場をとることができる. 類似性の観点から見れば, 転向派は中程度に類似した外集団である. そのため, 類似性と社会的アイデンティティ理論では, 転向派に対する集団間行動に関し異なる予測が提出される.

類似性の観点からは, 転向派は内集団と外集団の中間的存在であるため, 転向派は, 内集団に比べて差別され, 外集団に比べひいきされると考えられる. 一方, 社会的アイデンティティ理論の観点から考えると, 内集団から外集団への転向という行為(外集団への転向派, converted members to outgroup)は集団間

の差異を強く顕在化させ、かつ、自身の社会的アイデンティティを脅かすと考えられる。また、外集団から新たに内集団に移った内集団への転向派(converted members to ingroup)も、社会的アイデンティティをあいまいにする、信頼のおけない存在とみなされるだろう。その結果、外集団への転向派も内集団への転向派も、ともに内集団に比べ強く差別されると思われる。さらに、外集団との比較においても、外集団への転向派は差別されると考えられる。

また、少数派と多数派の影響過程の観点から考えると(Moscovici, 1976)、転向者が少数派と多数派のどちらに移動するかによって、転向という行為の解釈(原因帰属)の仕方も大きく異なる。すなわち、少数派から多数派への転向は、数的に優位な価値観から逸脱することを恐れ多数派の圧力に屈した、という「公的同調」の結果生じたものと解釈されやすいだろう(Deutsch & Gerard, 1955)。一方、多数派から少数派への転向は、少数派の価値観が真に正しいものとみなして受け入れたと解釈され、私的変化を引き起こしたと解釈されるだろう(Moscovici, 1980)。そして、このような転向派に対する帰属の違いは、少数派と多数派の集団間差別の程度に影響を及ぼすと考えられる。

第1に、外集団への転向派は、多数派にとっては、少数派の価値観を受け入れ自身の態度を真に変化させた人々である。これに対し、少数派にとって、外集団への転向派は少数派の価値観を安易に変え、優位な多数派に同調した人たちとみなされる。そのために、外集団の転向派は、内集団の価値をより強く脅かすものとして、少数派から強く差別されると考えられる。

第2に、内集団への転向派は、少数派にとっては、自身の価値観を真に変化させた人々であるのに対し、多数派にとっては、周囲の状況に合わせて自分の立場を変化させる、信頼のおけない人々であると知覚されると考えられる。

目 的

研究7では、転向派に対する集団間行動に関し、次の仮説を検討することを目的とする。第1に、類似性の観点からは、次のような仮説が設定される。

仮説1 内集団から外集団へ移行した外集団への転向派は、内集団に比べ差別されるだろう。

仮説2 外集団から内集団に移行した内集団への転向派は、内集団に比べ差別されるだろう。

仮説3a 外集団への転向派は外集団に比べひいきされるだろう。

一方、社会的アイデンティティ理論の観点からは、内集団と比較される時、外集団への転向派も内集団への転向派も差別されると予測する点で、類似性による仮説と同じである(仮説1および仮説2)。しかし、外集団と外集団への転向派を比較するとき、外集団への転向派は、転向という行為によって内集団の社会的アイデンティティを脅かすため、より差別させると考えられる。したがって、次の仮説が設定される。

仮説3b 外集団への転向派は外集団に比べ差別されるだろう。

また、少数派と多数派の影響過程の観点からは、次の仮説が設定される。

仮説4 多数派よりも少数派のほうが、より強く外集団への転向派を差別し、内集団をひいきするだろう。

仮説5 多数派よりも少数派のほうが、より強く外集団への転向派を差別し、むしろ外集団をひいきするだろう。

仮説6 多数派は、少数派よりも内集団への転向派をより強く差別するだろう。

なお、集団間比較の組合せが多くなり、被験者に過度の負担を避けるため、本研究では、内集団への転向派と外集団の比較は取り扱わず、後の研究で

検討することとする。

方 法

被験者 大正大学学生88人(男子15人,女子71人,性について無回答2人).
被験者は,研究3の被験者と同じであった。

実験計画 内集団サイズ(少数派/多数派)による1要因被験者間計画。

手続き 研究7は研究3に引き続き行われた。実験の流れをFigure 10.1に示す。研究3の終了後,被験者は社会的態度に関して前回と同じ質問紙に再び回答するよう求められた(Table 7.5 参照)。実験助手は結果の集計のためいったん退出した。20-30分後,実験助手は再び入室し,2回目の調査結果について以下のように告げた。「2回目の調査の結果,少数派も多数派も,ともに全体の約80%の人は1回目の調査と同じように答えましたが,約20%の人は異なる結果を示しました。すなわち,2回目の調査では,最初少数派の態度だった人の約20%が多数派の回答を,また多数派の約20%の人が少数派と同じような回答をし,態度を変化させました」それから被験者は,もう一度2人の他者の間で得点を分配する課題を行ってほしいと告げられた。そして,自分の新しい集団成員性とコード番号を知らされた。実際には,態度を変化させた被験者(転向派)は架空の集団であった。被験者には,研究3と同じ集団所属のフィードバックが与えられ,成員性は変化しなかった。得点分配課題に回答後,被験者は集団成員の選択課題を行い,実験は終了した。

分配マトリックス 得点分配課題において内集団びいきの測定に用いられた分配マトリックスは,研究2および研究3と同様であった。得点の分配は,(a)内集団—外集団への転向派,(b)内集団—内集団への転向派,(c)外集団—外集団への転向派の3種類の成員間の組合せで行われた。ただし,分配の

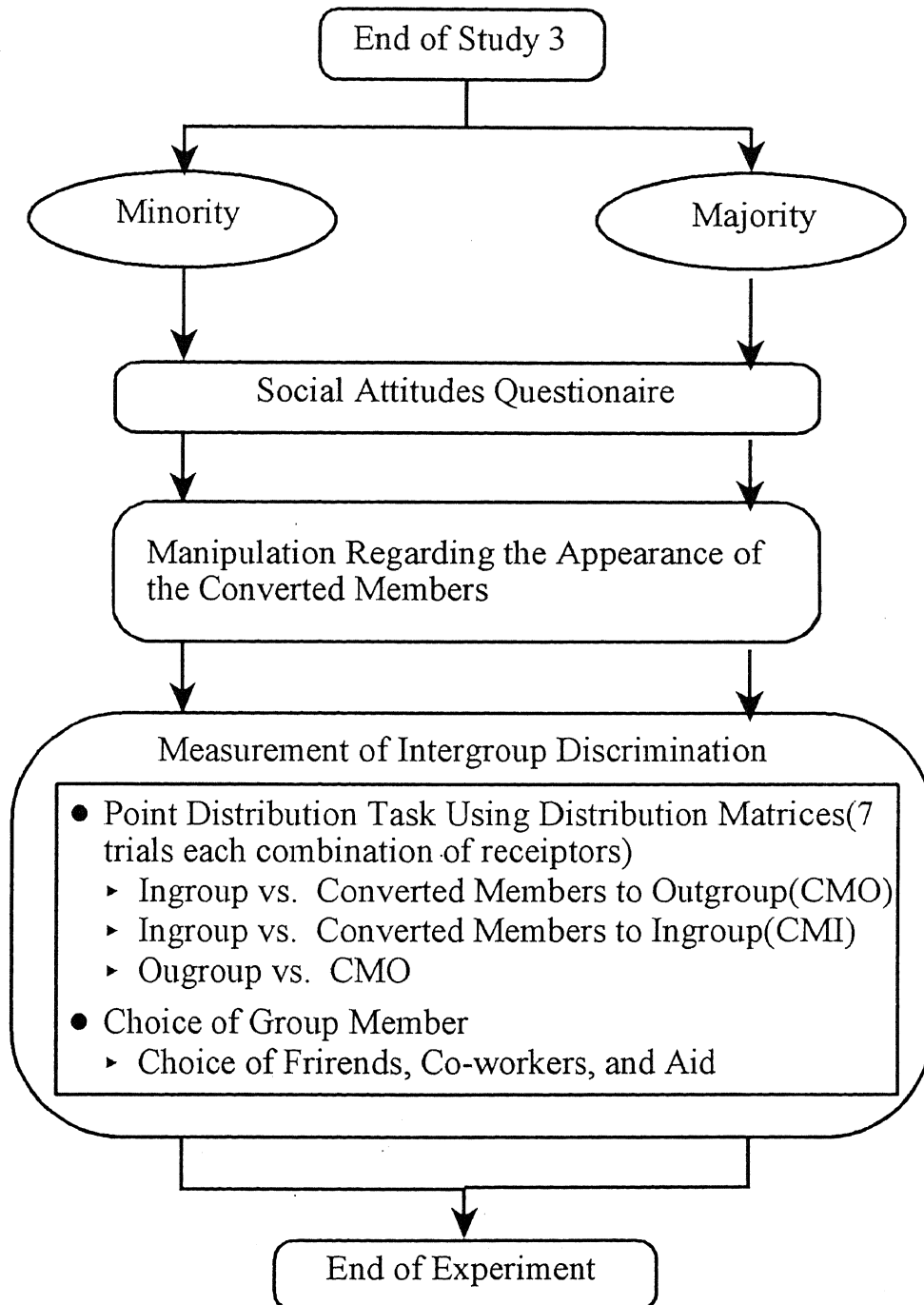


Figure 10.1 Flowchart in Study 7

回答課題が極端に多くなることを避けるため、被験者には4種類のマトリックス(内集団びいき,内集団びいきvs.公平性,内集団びいきvs.最大共同利益,最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益)につき,それぞれ一方のタイプのみ回答させた。したがって,受取人の組合せ(内集団—外集団への転向派,内集団—内集団への転向派,外集団—外集団への転向派)ごとに,被験者は得点分配を7試行行い,計21回の選択を行った。そして,同じタイプのマトリックスで反応値を込みにし,4つのプル得点と内集団びいき得点を分析指標とした。プル得点および内集団びいき得点は,正の値が転向派に対する差別(内集団あるいは外集団に対するひいき)を,負の値が内集団あるいは外集団に対する差別を表すように算出された。

集団成員の選択被験者は,(a)友人選択,(b)協働者選択,(c)援助者選択の各場面で,他の内集団成員・外集団成員・内集団への転向派・外集団への転向派の中から1つを選択するよう求められた。

結 果

転向派に対する差別行動 4種類のプル得点の平均値を得点の受取人の組合せごとにTable 10.1およびFigure 10.2に示した。「内集団びいき」については「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定,その他についてはWilcoxonの符号つき順位和検定を行った(両側検定)。結果は以下のように整理される。

1. **内集団—外集団への転向派間の分配** 少数派($n=44$)では,「内集団びいき」($t(43)=5.27, p<.001$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-4.09, p<.001$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-3.13, p<.01$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-3.66, p<.001$)のすべてで,外集団への転向派に対する差別—内集団びいきが有意であった。また多数派($n=44$)でも,「内集団びいき」

Table 10.1
Mean pull scores in different pairs of receivers in Study 7

Pull Score	Group Membership ^a			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Ingroup vs. Converted Members to Outgroup				
FAV	2.59***	3.26	0.90*	2.66
FAV on F	4.32***	5.71	1.55*	4.43
FAV on MJP	2.77**	5.28	1.88*	4.52
MD on MIP+MJP	3.55***	5.62	2.23**	4.05
Ingroup vs. Converted Members to Ingroup				
FAV	1.73***	3.09	0.83 ⁺	3.12
FAV on F	3.20***	5.39	0.95	5.03
FAV on MJP	2.41**	4.96	1.00 ⁺	4.29
MD on MIP+MJP	1.84*	4.92	0.93	4.53
Outgroup vs. Converted Members to Outgroup				
FAV	1.00 ⁺	3.31	0.85*	2.49
FAV on F	1.25	5.78	1.21 ⁺	4.30
FAV on MJP	1.73 ⁺	5.77	2.26**	4.30
MD on MIP+MJP	0.11	5.38	1.14 ⁺	3.99

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup or the outgroup; the more negative, to the converted members.

^a $n=44$ for each group.

⁺ $p<.10$. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$, Two-tailed.

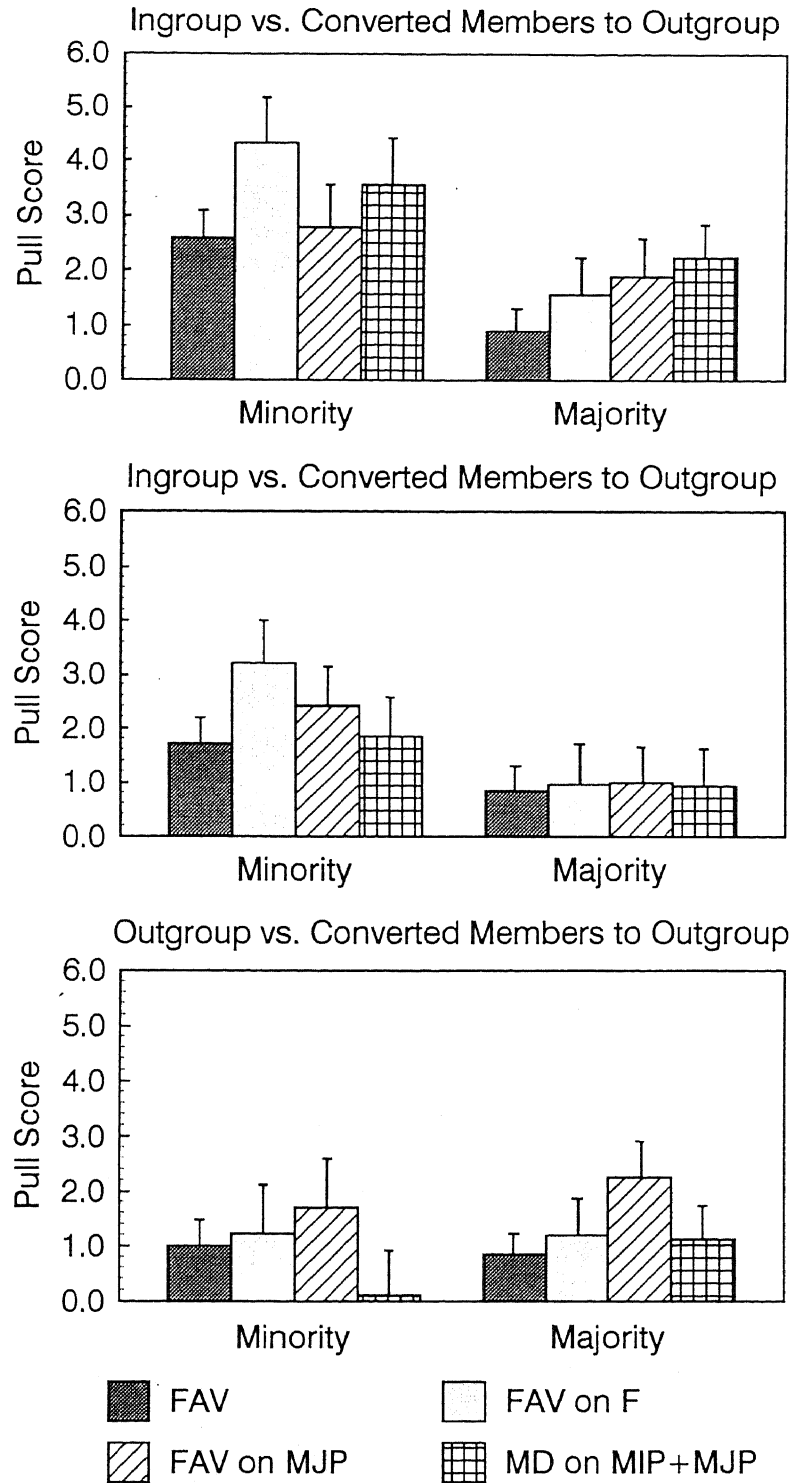


Figure 10.2 Mean pull scores in different pairs of receivers in Study 7

($t(42)=2.20, p<.05$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-2.25, p<.05$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-2.48, p<.05$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-3.14, p<.01$)のすべてで、有意に外集団への転向派を差別した。

2. 内集団—内集団への転向派間の分配 少数派では、「内集団びいき」($t(43)=3.71, p<.001$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-3.52, p<.001$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-2.99, p<.01$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.57, p<.05$)のすべてで、内集団への転向派を有意に差別し、内集団を有意にひいきした。多数派では、「内集団びいき」($t(42)=1.73, p<.10$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-1.92, p<.10$)の2つで、内集団への転向派に対する差別の有意傾向が見られた。

3. 外集団—外集団への転向派間の分配 少数派では、「内集団びいき」($t(43)=2.00, p<.10$)および「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-1.75, p<.10$)の2つで、外集団転向派を差別する有意傾向が見られた。一方多数派では、「内集団びいき」($t(42)=2.24, p<.05$)および「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-3.25, p<.01$)の2つで、有意に外集団転向派を差別し外集団をひいきした。また、「内集団びいきvs.公平性」($z=-1.75, p<.10$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-1.68, p<.10$)の2つで、外集団転向派を差別する有意傾向が見られた。

内集団びいき得点についても、平均値をTable 10.2およびFigure 10.3に示す。同様に、「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定(両側)を行った。その結果、内集団と外集団への転向派に対する分配では、少数派($M=25.68, t(43)=5.30, p<.001$)も多数派($M=12.43, t(41)=2.82, p<.01$)も、ともに有意な内集団びいきを示した。また、内集団と内集団への転向派に対する分配では、少数派が有意な内集団びいきを示し($M=19.53, t(42)=5.34, p<.001$)、多数派では内集団びいきの有意傾向が見られた($M=7.26, t(41)=1.74, p<.10$)。さらに、外集団と外集団へ

Table 10.2
Mean ingroup favoritism scores in different pairs of receivers in Study 7

Pair of Receivers	Group Membership			
	Minority		Majority	
	M	SD	M	SD
Ingroup vs. CMO	25.68***	32.15	12.43**	28.55
Ingroup vs. CMI	19.53***	24.00	7.26 ⁺	27.06
Outgroup vs. CMO	9.80*	31.82	12.02**	25.11

note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup or outgroup; the more negative, to the converted members.

CMI=Converted Members to Ingroup. CMO=Converted Members to Outgroup.

⁺ $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$, Two-tailed.

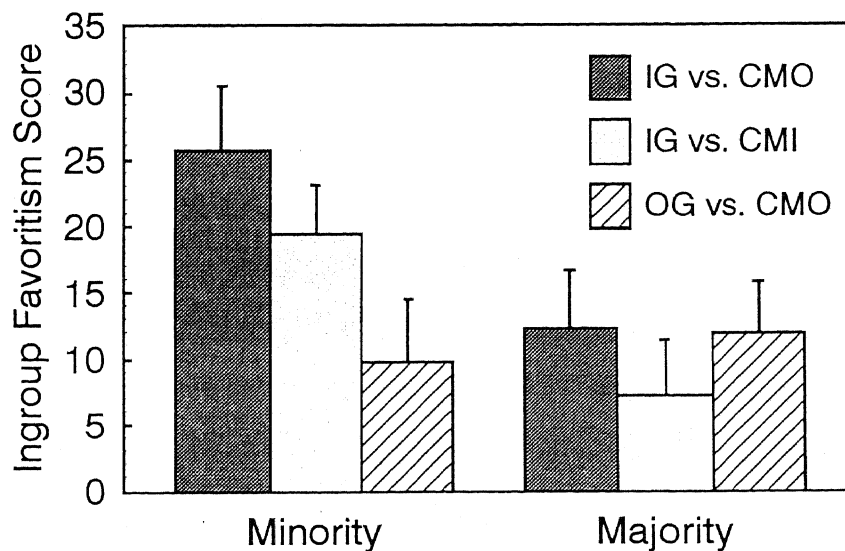


Figure 10.3 Mean ingroup favoritism scores in different pairs of receivers in Study 7

の転向派の組合せについては、少数派($M=9.80$, $t(43)=2.04$, $p<.05$)も多数派($M=12.02$, $t(42)=3.14$, $p<.01$)も、ともに外集団に有意に高い得点を与え、転向派に対する差別を示した。

以上の結果から、内集団との比較において、内集団から外集団の態度に変化させた外集団への転向派も、外集団から内集団の態度に転向した内集団への転向派も、明確に差別されたといえる。したがって、仮説1および仮説2は支持された。さらに、外集団への転向派は、外集団に比べより類似しているとみなすことができるにもかかわらず、少数派・多数派の両方から差別された。したがって、仮説3aは棄却され、仮説3bが支持された。

集団間の比較 続いて、「内集団—外集団への転向派」「内集団—内集団への転向派」「外集団—外集団への転向派」の各々において、少数派と多数派の間で、内集団びいき得点を指標とする t 検定(両側検定)を行った。その結果、「内集団—外集団への転向派」($t(84)=2.02$, $p<.05$)と「内集団—内集団への転向派」($t(83)=2.21$, $p<.05$)の組合せにおいて、有意差が見られた。すなわち、どちらの場合でも、少数派は多数派よりも有意に強く転向派を差別し、内集団をひいきした。以上より、少数派と多数派の対転向派差別の強さに関して設定された仮説のうち、仮説4は支持されたが、仮説5および仮説6は支持されなかった。

集団成員の選択 3つの選択場面(友人選択, 協働者選択, 援助者選択)における内集団および外集団の選択率をTable 10.3ならびにFigure 10.4に示す。少数派では、友人選択, 協働者選択, 援助者選択のすべてで、各集団の成員を選択した人数が有意に異なっていた(順に $\chi^2(3, n=44)=34.36, 22.55, 31.82$, $p<.01$ 共通)。残差分析の結果、すべての項目で、内集団を選択した被験者の割合が高く($p<.001$), 内集団および外集団への転向派の選択率は低かった($p<.05$)。

多数派でも、友人選択, 協働者選択, 援助者選択のすべてで、各集団の成員を選択した人数が有意に異なっていた(順に $\chi^2(3, n=41)=9.05, 11.20$, $p<.05$;

31.82, $p < .01$). 残差分析の結果,友人選択および協働者選択で,内集団を選択した被験者の割合が高く($p < .05$),援助者選択では内集団の選択率が高く($p < .001$)内集団への転向派の選択率は低かった($p < .05$).

Table 10.3

Choice rates of different targets for the majority and minority in Study 7

Membership	Target			
	Ingroup	Outgroup	CMI	CMO
Choice of Friends				
Minority	59.09	29.55	9.09	2.27
Majority	39.20	34.15	14.63	12.20
Choice of Co-workers				
Minority	52.27	29.55	11.36	6.82
Majority	46.34	24.39	12.20	17.07
Choice of Aid				
Minority	56.82	31.82	6.82	4.55
Majority	53.66	24.39	9.76	12.20

Note. CMI=Converted Members to Ingroup. CMO=Converted Members to Outgroup

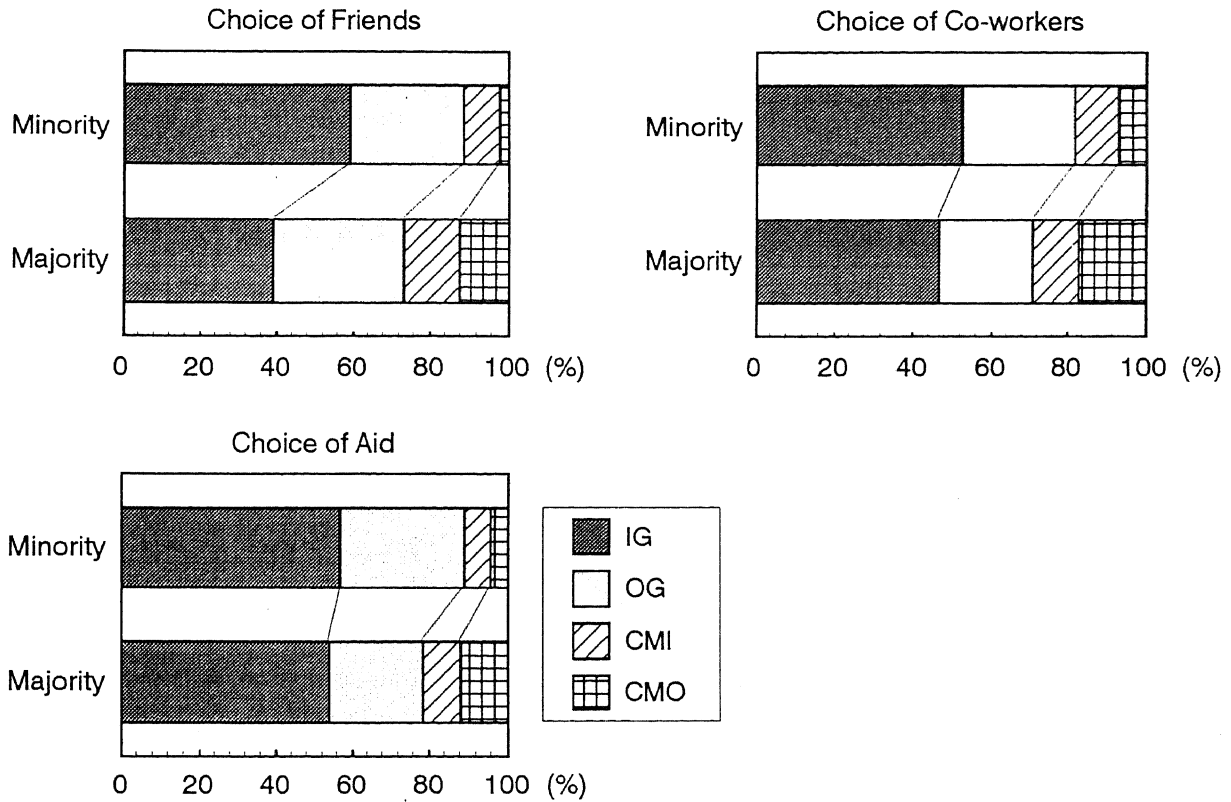


Figure 10.4 Choice rates of different targets for the majority and minority in Study 7

note. IG=Ingroup, OG=Outgroup, CMI=Converted Members to Ingroup, CMO=Converted Members to Outgroup

考 察

本研究の結果は、集団間差別の有無に関し当初設定された仮説1、仮説2および仮説3bを支持するものといえる。類似性の観点から見れば、転向派は内集団と外集団の中間的存在であるとみなすことができる。にもかかわらず、転向派は少数派・多数派の双方から差別された。以前態度が類似していた外集団への転向派は、内集団とともに分配されたときに強く差別された(仮説1)。それだけでなく、外集団と比較されるときでも、外集団への転向派のほうがより類似してい

るにもかかわらず、有意に差別する反応が見られた(仮説3b)。また、転向によって態度が類似した内集団転向派も、内集団との比較において明確に差別された(仮説2)。集団成員の選択においても、少数派・多数派ともに内集団成員の選択率は高いものであった。

以上より、社会的アイデンティティは、単なる個人間の類似性とは質的に異なることが示唆された。内集団の価値に異を唱えた「外集団への転向派」だけでなく、新たに内集団に転向した「内集団への転向派」に対しても、態度を変化させた転向派は信頼のおけない存在、集団の価値を脅かす存在として知覚されたと考えられる。その結果、転向派は少数派多数派の双方から差別されたと考えられる。本研究の結果は、類似性の観点から明確な予測をするのは難しい。これに対し、社会的アイデンティティ理論は、集団間の価値性の対立、自己の集団の意識化という集団性の観点を直接取り扱うものであり、その分析の有効性が示されたといえよう。

また、少数派と多数派の対転向派差別の強さに関して設定された仮説のうち、仮説4は支持されたが、仮説5および仮説6は支持されなかった。すなわち、「内集団—外集団への転向派」の分配では、多数派より少数派のほうが、強く外集団への転向派を差別した(仮説4)。しかし、仮説5に反して、「外集団—外集団への転向派」の分配で、少数派と多数派が示した外集団への転向派に対する差別の程度に差は見られなかった。さらに、仮説6に反して、「内集団—内集団への転向派」の分配では、多数派より少数派のほうが強く内集団への転向派を差別していた。集団成員の選択でも、少数派で転向派の選択率が有意に低く、本研究では、(少なくとも内集団と比較するとき)少数派のほうが強く転向派を差別したといえる。本研究の少数派は、内集団と外集団間の分配(研究3)において、多数派よりも強い内集団びいきを示していた。したがって、少数派は、多数派よりも強く自身の社会的アイデンティティを意識していたと考えられ、転向派

第10章 転向派に対する集団間差別行動

10.1 転向派に対する集団間差別行動

に対する集団間差別行動においても,社会的アイデンティティの意識化の効果が相対的に強く表れたと思われる. 研究7では,転向に対する解釈(原因帰属)が少数派・多数派の対転向派差別行動に及ぼす効果の存在について,明らかにされなかったが,以後の研究でさらに検討することとする.

10.2 集団サイズ格差の変化と転向派に対する集団間差別行動

【研究8】⁷

研究7では、以前の態度を変化させ、集団成員性を変更した転向派に対し、少数派も多数派もともに差別を示すことが明らかにされた。また、転向派に対する差別は特に少数派でより強かった。

しかし、研究7の結果だけでは、転向派に対する差別行動を十分に検討したとはいえない。第1に、転向派の存在は、これまでの少数派—多数派の勢力関係を変化させることを意味する。しかし、研究7では、転向派により全体の集団サイズ格差がどのように変化したのかについて、明確な教示を与えていない。また、研究7では得点分配課題が極端に多くなることを避けるため、外集団と内集団への転向派に対する分配は行われなかった。この点からも、転向派に対する集団間行動について、繰り返し検討していく必要があると思われる。

集団サイズの格差の変化が、後の集団間行動に及ぼす影響を扱った先行研究は報告されていない。しかし、集団サイズが集団の占める勢力を表すならば、サイズ格差の変化は次のような意味を持つと思われる。すなわち、集団サイズの格差が拡大する条件とは、少数派から多数派へ転向する人々が多く、逆は少ない状況を表す。このとき、少数派の占める勢力はさらに弱まり、多数派の勢力が強まる。反対に、集団サイズの格差が縮小するならば、少数派と多数派の勢力もまたより拮抗したものとして知覚されるだろう。このような状況で、研究7と同様に集団の影響過程の違いもふまえて考えると、次のような結果が推測される。

第1に、外集団への転向派と内集団の間で分配を行う場合、

⁷ 久保田健市 1998b 集団サイズ格差の変化と少数派および多数派集団の対転向派差別行動—最小条件集団パラダイムを用いて— 日本社会心理学会第39会大会発表論文集 362-363.

1. 集団サイズの格差が拡大する場合、少数派にとって、外集団への転向派とは、多数派に同調した人々であり、少数派の勢力を弱めた原因であると知覚されるだろう。これに対し、勢力を高めた多数派にとって、外集団への転向派は、少数派の価値観を真に受容したごく少数の人々である。それゆえに、少数派は多数派よりも外集団の転向派をより強く差別するだろう。

2. 集団サイズの格差が縮小する場合、外集団への転向派に対する解釈の仕方は、サイズ格差拡大条件と変わらない。しかし、外集団への転向派は、多数派の勢力を大きく損なわせた存在であるため、少数派だけでなく多数派も、ともに外集団への転向派を差別し、その程度に差は見られないと思われる。

第2に、内集団への転向派と内集団の間で分配が行われるとき、

3. 集団サイズの格差が拡大する場合、少数派にとって、内集団への転向派は劣勢な少数派の価値観の正しさを認め、態度を変化させた人々とみなされやすい。一方、多数派では、内集団への転向派は多数派に同調する信頼のおけない存在ととらえられるだろう。したがって、少数派は、内集団転向派を差別しないだろう。一方、多数派は、内集団への転向派を強く差別するだろう。

4. 集団サイズの格差が縮小する場合、内集団への転向派に対する解釈の仕方は、やはりサイズ格差拡大条件と同様である。しかし、多数派において、内集団への転向派は自らの勢力の減少を多少なりとも防ぐことに貢献したと知覚されるため、内集団への転向派に対する差別は弱められると予想される。それゆえに、少数派と多数派で、内集団への転向派に対する差別の程度に差は見られないだろう。

第3に、内集団への転向派と外集団の間で分配がなされるとき、

5. 集団サイズの格差が拡大する場合、3.と同じ理由によって、少数派は外集団よりも内集団への転向派に対して好意的であり、ひいきするだろう。一方、多数派は、不利な状況にもかかわらず自らの態度を貫いている少数派(外集団)

よりも、内集団への転向派のほうを差別するだろう。

6. 集団サイズの格差が縮小する場合、4と同じ理由により、少数派も多数派も、外集団に比べて内集団転向派を強く差別することはないであろう。

目 的

研究8では、転向派の存在によって集団サイズ格差が拡大した状況および縮小した状況を明確に設定する。そして、(a)外集団への転向派と内集団、(b)内集団への転向派と内集団、(c)内集団への転向派と外集団の組合せで、転向派に対する集団間差別行動を再び検討することを目的とする。

方 法

被験者 筑波大学学生86人(男子27人,女子59人)。

実験計画 内集団サイズ(少数派/多数派)×サイズ格差の変化(拡大/縮小)による2要因被験者間計画。

手続き 実験は、1回につき7～12人の被験者を対象に実施された。実験の流れをFigure 10.5に示す。最初に、被験者は3項目の意見(プライバシーを法的に保護,少年法の改正,死刑制度の廃止)について、賛成・反対のどちらかの態度を選ぶ質問紙に回答した(Table 10.4)。実験助手が集計をする間、被験者はそれぞれの意見についての賛成・反対の理由の代表的なものをいくつか読み、それを評定する課題を行った(ダミー課題)。次に、被験者は以前に行われたとされる架空の調査の結果を告げられた。その内容は、回答傾向が全体のおよそ80%の多数派と20%の少数派とに大きく二分されるというものであった。続いて、各被験者が多数派・少数派のどちらの態度であったかを知らせ、被験者

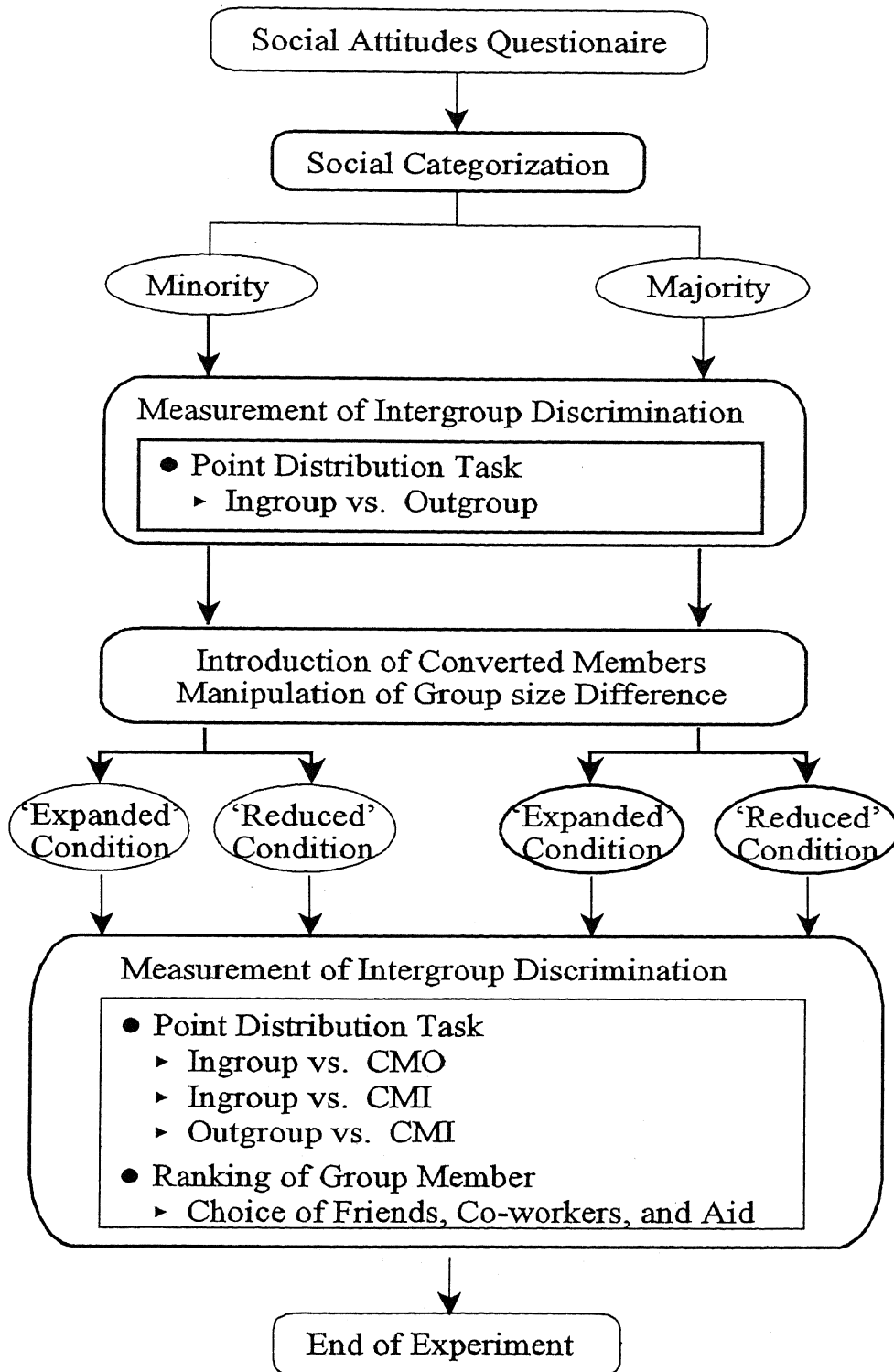


Figure 10.5 Flowchart in Study 8

Table 10.4

Three items of social attitudes questionnaire used in Study 8

-
1. 最近のマスコミによる取材・報道は度を越しており,もっと取材される側のプライバシーが守られるような法的規制を設けるべきだ
 2. 刑事処分を負わせることができる年齢を16歳以上としている点や,真相究明に限界がある点で,現行の少年法は時代と合っていないため改正すべきだ
 3. たとえ刑罰であるとしても,人を殺すことにはかわりはないから,日本でも死刑制度は廃止するべきだ
-

Note. For each items, subjects answered whether they agreed or not.

は実験室内の匿名の他者に対し,第1の得点分配課題を行った。その後,以前の調査について新たな教示を与えた。その教示では,以前の調査の回答者にもう一度態度を尋ねたところ,態度を変化させた人たち(転向派)がいたため,集団の割合が変化した旨を知らせた(サイズ格差変化の操作, Table 10.5)。すなわち,半数の被験者には,少数派から多数派に態度を変えた人が比較的多く,多数派と少数派の格差がおよそ90%と10%に拡大したことが告げられた(格差拡大条件)。残りの半数には,多数派から少数派へ移った人が多く,集団サイズの格差は67%と33%に縮小したことが知らされた(格差縮小条件)。集団サイズの変化については,スライドを用い,具体的な数字をあげて教示した。被験者は,架空の調査の参加者を対象に,内集団・外集団・内集団への転向派・外集団への転向派の4集団の成員に得点を分配する課題を行った。その後,集団成員の選択課題と実験後質問紙に回答し,実験は終了した。

得点分配課題 得点分配課題には,研究4と同様の分配マトリックスを用いた。そして,「内集団—外集団への転向派」「内集団—内集団への転向派」「外集団—内集団への転向派」の3つの組合せで,それぞれ7試行ずつ行った。プル

第10章 転向派に対する集団間差別行動
10.2 集団サイズ格差の変化と転向派に対する集団間差別行動

Table 10.5
Instructed number of group members

Group	Change of group size difference	
	Expanded	Reduced
Majority	151	129
CMMaj ^a	25	3
CMMin ^b	3	25
Minority	19	41

^a CMMaj=Converted Members to Majority

^b CMMin=Converted Members to Minority

得点および内集団びいき得点は、正の値が転向派に対する差別(内集団あるいは外集団に対するひいき)を、負の値が内集団あるいは外集団に対する差別(転向派に対するひいき)を表すように算出された。

集団成員の選択 被験者は、(a)友人選択、(b)協働者選択、(c)援助者選択の場面で、内集団・外集団・内集団への転向派・外集団への転向派の成員のうち、選びたいと思う順序を回答させた(1～4)。

質問紙の構成 得点分配課題後に実施された質問紙の内容は、以下のとおりである。

集団の優位性の知覚 世間一般では、少数派と多数派のどちらの態度が優勢であると思うかを7段階で評定させた(「多数派のほうが非常に優勢」—「少数派のほうが非常に優勢」)。

集団の主観的正しさの知覚 少数派と多数派のどちらの態度が個人的に正しいと思うかを7段階で評定させた(「多数派のほうが非常に正しい」—「少数派のほうが非常に正しい」)。

結 果

結果の分析は、内集団びいき得点の値で±3SD以上の偏りが見られた3人のデータを削除して行われた。

少数派—多数派間の分配(内集団びいき) 第1の得点分配における4タイプのプル得点の平均値を少数派・多数派ごとにTable 10.6およびFigure 10.6に示す。「内集団びいき」については「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定、その他についてはWilcoxonの符号つき順位和検定を行った(片側検定)。その結果、少数派($n=40$)では、「内集団びいき」($t(40)=1.70, p<.05$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-2.23, p<.05$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-2.41, p<.01$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-1.76, p<.05$)のすべてで、有意な内集団びいきが見られた。また多数派($n=43$)でも、「内集団びいき」($t(42)=1.77, p<.05$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-2.33, p<.05$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.39, p<.01$)の3つのマトリックスで、有意な内集団びいきが見られた。

続いて、内集団びいき得点についても、平均値をTable 10.7およびFigure 10.7に示す。同様に、少数派・多数派ごとに、「母平均=0」を帰無仮説とする t 検定(片側検定)を行った。すると、少数派($M=7.53, t(39)=2.17, p<.05$)も多数派($M=5.56, t(42)=2.13, p<.05$)も、ともに有意な内集団びいきを示した。さらに、内集団びいき得点を指標とし、内集団サイズを要因とする t 検定(両側検定)を行った。その結果内集団サイズの効果は有意でなかった($t(81)=0.46, n.s.$)。

以上の結果より、本研究の少数派と多数派の内集団びいき性はほぼ等しいレベルであり、差はなかったものと考えられる。

転向派に対する差別行動 「内集団—外集団への転向派」「内集団—内集団への転向派」「外集団—内集団への転向派」の各組合せで、プル得点お

Table 10.6
 Mean pull scores in distribution between the majority and minority in Study 8

Pull Scores	Group Membership			
	Minority ^a		Majority ^b	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
FAV	0.53*	1.95	0.41*	1.51
FAV on F	0.88*	3.22	0.74*	2.78
FAV on MJP	1.18**	3.25	0.60	2.58
MD on MIP+MJP	1.20*	4.45	1.44**	3.85

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

^a $n=40$, ^b $n=43$

* $p<.05$. ** $p<.01$, One-tailed.

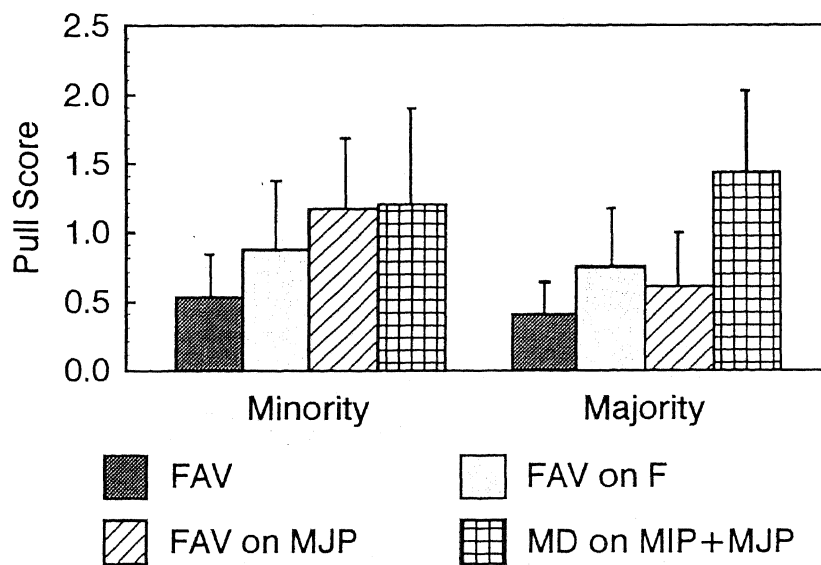


Figure 10.6 Mean pull scores in distribution between the majority and minority in Study 8

第10章 転向派に対する集団間差別行動
 10.2 集団サイズ格差の変化と転向派に対する集団間差別行動

Table 10.7
 Mean ingroup favoritism scores in the distribution between
 the majority and minority in Study 8

	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
IFS	7.53*	21.95	5.56*	17.10

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

* $p < .05$, One-tailed.

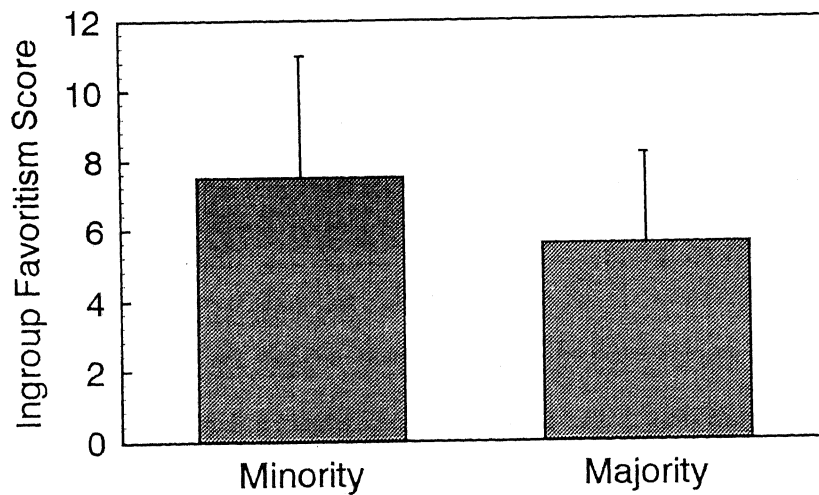


Figure 10.7 Mean ingroup favoritism scores in distribution between the majority and minority in Study 8

よび内集団びいき得点の平均値を各実験条件ごとにTable 10.8に示す. プル得点の「内集団びいき」と内集団びいき得点については「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定, 「内集団びいき」以外のプル得点についてはWilcoxonの符号つき順位和検定を行った(両側検定). 結果は次のように整理される.

1. 「内集団—外集団への転向派」間の分配 格差拡大条件において, 少数派($n=19$)は, 「内集団びいきvs. 公平性」($z=-2.34, p<.05$) 「内集団びいきvs. 最大共同利益」($z=-2.80, p<.01$) 「最大差異vs. 最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.78, p<.01$)の3つのマトリックスおよび内集団びいき得点($t(18)=3.93, p<.001$)で, 有意に転向派を差別した. これに対し, 多数派($n=22$)では, いずれの指標からも外集団への転向派と内集団のどちらも差別しなかった.

格差縮小条件において, 少数派($n=21$)は, 「内集団びいき」($t(20)=4.20, p<.001$) 「内集団びいきvs. 公平性」($z=-2.33, p<.05$) 「内集団びいきvs. 最大共同利益」($z=-2.84, p<.01$) 「最大差異vs. 最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.84, p<.01$)および内集団びいき得点($t(20)=3.40, p<.01$)のすべてで有意に転向派を差別した. 多数派($n=21$)では, 「内集団びいきvs. 最大共同利益」($z=-2.48, p<.05$)と内集団びいき得点($t(20)=2.11, p<.05$)で, 外集団への転向派に対する差別が有意であった. また, 「内集団びいき」($t(20)=2.07$)および「内集団びいきvs. 公平性」($z=-1.78$)では, 転向派を差別する有意傾向が見られた($p<.10$).

2. 「内集団—内集団への転向派」間の分配 外集団への転向派と内集団に対する分配とは異なり, 格差拡大条件の少数派では, いずれのマトリックスおよび内集団びいき得点からも, 内集団への転向派に対する有意な差別が見られなかった. これに対し, 格差拡大条件の多数派は, 「内集団びいき」($t(21)=2.33, p<.05$) 「内集団びいきvs. 公平性」($z=-2.43, p<.05$) 「内集団びいきvs. 最大共同利益」($z=-2.61, p<.01$) 「最大差異vs. 最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.97, p<.01$) 「内集団びいき得点」($t(21)=3.26, p<.01$)のすべてで, 有意に転向派を差

第10章 転向派に対する集団間差別行動
10.2 集団サイズ格差の変化と転向派に対する集団間差別行動

Table 10.8

Mean pull scores and ingroup favoritism scores for different combination of receivers in different experimental conditions

	Group Membership							
	Minority				Majority			
	Expanded ^a		Reduced ^b		Expanded ^c		Reduced ^c	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Ingroup vs. Converted Members to Outgroup								
FAV	0.76	2.47	2.12***	2.31	-0.64	1.94	0.98 ⁺	2.16
FAV on F	1.84*	3.30	1.90*	4.37	-0.32	3.48	1.71 ⁺	4.14
FAV on MJP	3.05**	3.89	2.86**	3.92	-0.59	3.42	2.05*	3.81
MD on MIP+MJP	2.95**	4.23	3.19**	4.55	-0.86	4.25	0.81	4.05
IFS	17.32***	19.20	19.81**	26.74	-4.55	21.44	12.33*	26.74
Ingroup vs. Converted Members to Ingroup								
FAV	0.18	1.20	0.93 ⁺	2.16	0.95*	1.92	0.69 ⁺	1.63
FAV on F	-0.89	4.03	0.19	3.54	1.32*	2.40	0.76	2.26
FAV on MJP	0.00	2.98	0.62	1.94	1.45**	2.15	0.95 ⁺	2.06
MD on MIP+MJP	1.11	3.78	1.19	3.82	2.55**	3.52	0.81	4.21
IFS	-0.32	19.68	5.29	15.53	11.45**	16.50	6.57*	14.00
Outgroup vs. Converted Members to Ingroup								
FAV	-0.82	2.06	-0.60	2.41	0.91*	2.02	0.07	2.38
FAV on F	0.32	3.50	-1.33*	4.15	2.00*	3.77	0.05	4.12
FAV on MJP	-0.05	3.08	-1.71 ⁺	5.09	2.27**	3.71	-0.14	3.81
MD on MIP+MJP	-1.26 ⁺	3.12	-2.14 ⁺	5.43	2.55*	5.00	-0.76	4.98
IFS	-3.68	15.79	-11.14	30.89	15.18**	23.44	-0.95	26.74

Note. IFS=Ingroup Favoritism Score

The more positive the score, the more favoritism to the ingroup or the outgroup; the more negative, to the converted members.

^a *n*=19. ^b *n*=22. ^c *n*=21.

別した。

格差縮小条件では、少数派は「内集団びいき」($t(20)=1.97, p<.10$)のマトリックスでのみ、内集団への転向派を差別する有意傾向を示した。多数派では、内集団びいき得点で内集団への転向派に対する差別が有意であり($t(20)=2.15, p<.05$)、「内集団びいき」($t(20)=1.94, p<.10$)および「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-1.95, p<.10$)で、内集団への転向派を差別する有意傾向が見られた。

3. 「外集団—内集団への転向派」間の分配 格差拡大条件では、少数派は「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-1.72, p<.10$)のマトリックスで、むしろ内集団への転向派をひいきし外集団を差別する有意傾向が見られた。一方、多数派は、「内集団びいき」($t(21)=2.12, p<.05$)「内集団びいきvs.公平性」($z=-2.41, p<.05$)「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-2.67, p<.01$)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-2.33, p<.05$)内集団びいき得点($t(21)=3.04, p<.01$)のすべてで、外集団に比べ内集団への転向派を有意に差別した。

格差縮小条件では、少数派は、「内集団びいきvs.公平性」($z=-2.36, p<.05$)のマトリックスで、有意に内集団転向派をひいきし、外集団を差別した。また、「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=-1.89$)および「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」($z=-1.94$)で、内集団への転向派をひいきする有意傾向が見られた($p<.10$)。一方、いずれのマトリックスにおいても、多数派が外集団と内集団への転向派のどちらか一方を有意にひいきすることはなかった。

転向派差別の条件間比較 続いて、「内集団—外集団への転向派」「内集団—内集団への転向派」「外集団—内集団への転向派」の各々について、内集団びいき得点を指標とし、内集団サイズ(少数派/多数派)と格差変化(拡大/縮小)を要因とする2要因分散分析を行った。

1. 「内集団—外集団への転向派」間の分配(Figure 10.8) では、有意な内集

団サイズの主効果($F(1,79)=7.84, p<.01$)が見られた。すなわち、多数派よりも少数派がより強く外集団への転向派を差別した。加えて、集団サイズ格差の主効果が有意な傾向を示した($F(1,79)=3.42, p<.10$)。結果として、格差の縮小によって相対的に転向派に対する差別は強まり、拡大によって弱められる傾向が示唆された。

2. 「内集団—内集団への転向派」間の分配(Figure 10.9) では、内集団サイズの主効果が有意傾向を示し($F(1,79)=3.25, p<.10$)、少数派より多数派のほうが、内集団への転向派を強く差別する傾向を示した。

3. 「外集団—内集団への転向派」間の分配(Figure 10.10) では、内集団サイズ($F(1,79)=6.98, p<.01$)およびサイズ格差の変化の主効果($F(1,79)=4.60, p<.05$)が有意だった。すなわち、少数派より多数派で、および、格差が縮小すると

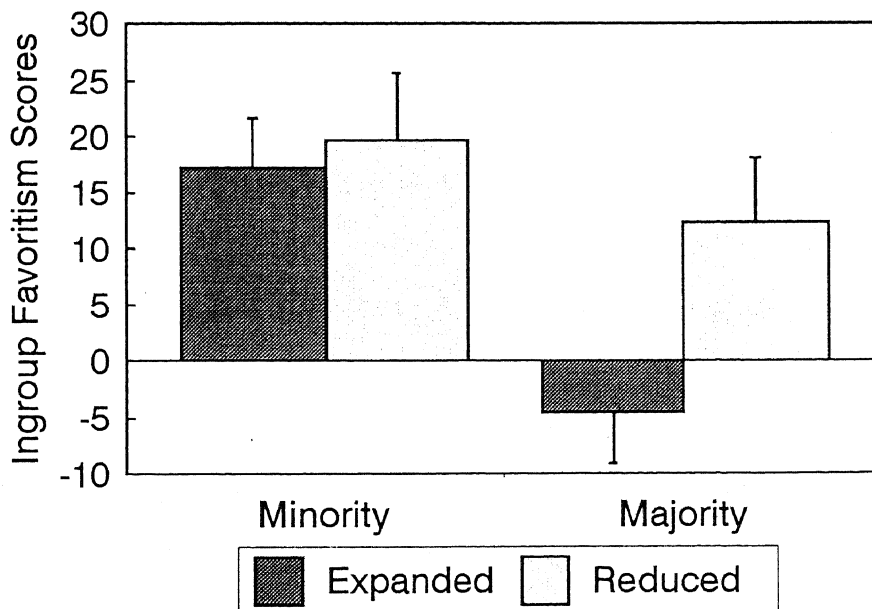


Figure 10.8 Mean ingroup favoritism scores in the distribution between ingroup and converted members to outgroup, for different experimental conditions

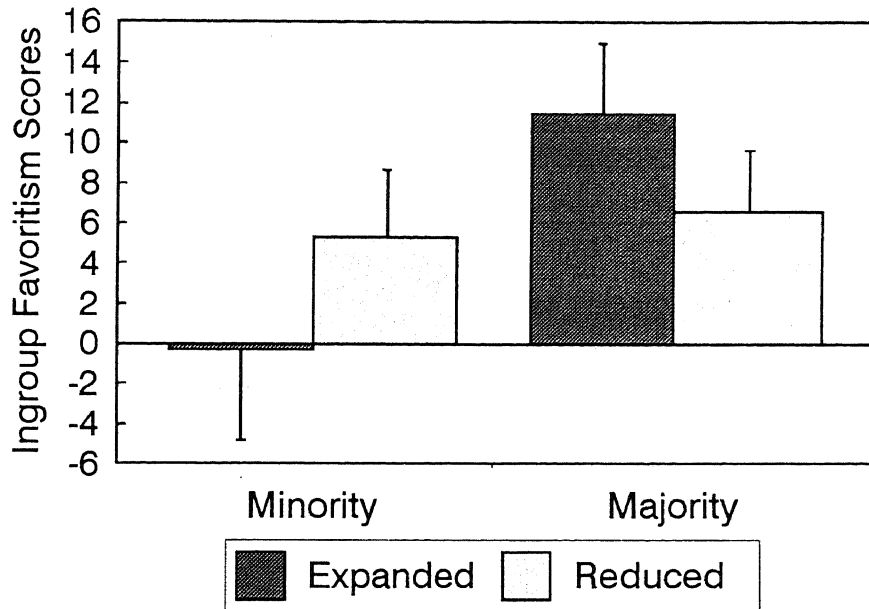


Figure 10.9 Mean ingroup favoritism scores in the distribution between ingroup and converted members to ingroup, for different experimental conditions

きより拡大するときで、内集団への転向派に対する差別は強められた。しかし、いずれの分配においても、内集団サイズと集団サイズ格差の有意な交互作用は見られなかった。

以上の結果を整理すると、第1に、「内集団—外集団への転向派」の分配では、格差拡大条件の多数派以外の実験条件において、外集団への転向派に対かった。これに対し、「内集団—内集団への転向派」のし有意な差別が示され、特に少数派および格差縮小条件で差別の程度が大きい分配では、集団サイズ格差の変化にかかわらず、多数派で内集団への転向派を差別する行動が見られ、少数派では明確な差別は示されなかった。さらに、「外集団—内集団への転向派」の分配では、格差拡大条件の多数派のみが、外集団に比べ内集団への転向派を有意に差別した。その一方で、格差縮小条件の少数派では、むしろ

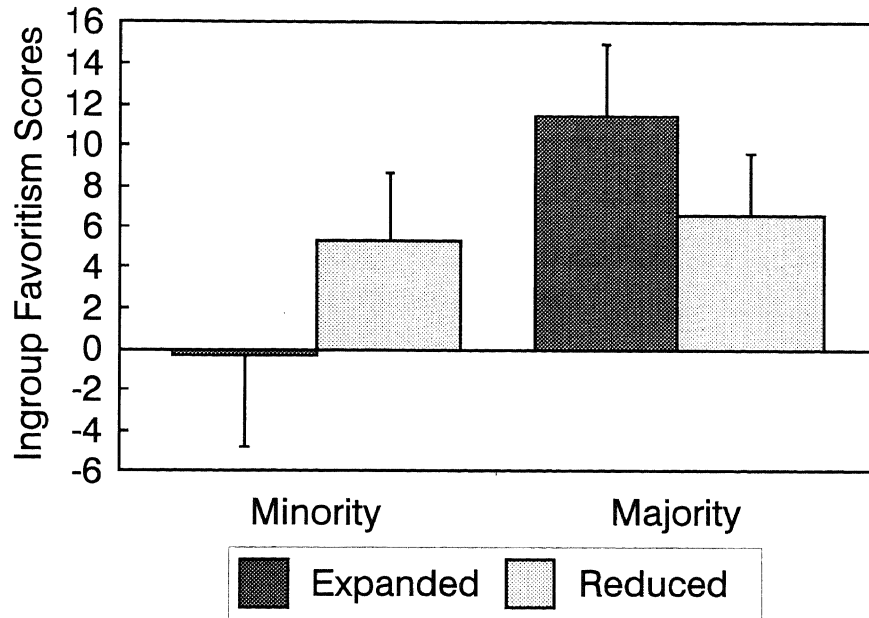


Figure 10.10 Mean ingroup favoritism scores in the distribution between outgroup and converted members to ingroup, for different experimental conditions

る内集団への転向派をひいきする傾向が見られた。

集団成員の選好 3つの選択場面(友人選択,協働者選択,援助者選択)における各ターゲット集団の選択順位の中央値を少数派・多数派ごとにTable 10.9に示す。Friedmanの検定を少数派・多数派ごとに行ったところ,結果は次のように整理される。

第1に,格差拡大条件において,少数派では,「友人選択」($\chi^2(3, n=19)=10.77, p<.05$),「協働者選択」($\chi^2(3, n=19)=23.91, p<.001$),「援助者選択」($\chi^2(3, n=19)=21.25, p<.001$)のすべてで,各集団の選択順位に差が見られた。符号検定による多重比較(Ryan法)の結果,「友人選択」の場面ではいずれの集団の対でも有意な順位差は見られなかった(これは,被験者数が少ないために,多重比較における検定力が弱くなったためと考えられる。以下の有意差の見られな

第10章 転向派に対する集団間差別行動
 10.2 集団サイズ格差の変化と転向派に対する集団間差別行動

Table 10.9
 Median of rank of different targets for the majority and minority in Study 8

Target	Group Membership			
	Minority		Majority	
	Expanded	Reduced	Expanded	Reduced
Choice of Friends				
Ingroup	1.0	1.0	2.0	2.0
Outgroup	3.0	3.0	2.0	2.0
CMI	2.0	2.0	3.0	3.0
CMO	3.0	3.0	2.0	3.0
Choice of Co-workers				
Ingroup	1.0	1.0	2.0	1.0
Outgroup	3.0	3.0	3.0	3.0
CMI	2.0	2.0	3.0	2.0
CMO	4.0	3.0	3.0	3.0
Choice of Aid				
Ingroup	1.0	1.0	1.0	1.0
Outgroup	3.0	3.0	3.0	4.0
CMI	2.0	2.0	2.0	2.0
CMO	3.0	3.0	3.0	3.0

Note. CMI=Converted Members to Ingroup. CMO=Converted Members to Outgroup

い多重比較も同様である)。「協働者選択」の場面では、内集団は外集団および外集団への転向派に比べ、有意に順位が高かった。また、内集団の転向派は、外集団の転向派に比べ有意に選択されやすかった。「援助者選択」の場面

では、内集団および内集団の転向派が外集団への転向派に比べ有意に高く順位づけられた。これに対し、多数派で選択順位に差が見られたのは、「援助者選択」($\chi^2(3, n=22)=30.60, p<.001$)のみであった。多重比較の結果、内集団の選択順位は、外集団および外集団への転向派に比べ有意に高かった。さらに、内集団への転向派は、外集団への転向派よりも有意に選択されやすかった。

第2に、格差縮小条件において、少数派では、「友人選択」($\chi^2(3, n=21)=15.63, p<.01$)、「協働者選択」($\chi^2(3, n=21)=21.74, p<.001$)、「援助者選択」($\chi^2(3, n=21)=16.54, p<.001$)のすべてで、各集団の選択順位に差が見られた。多重比較の結果、「友人選択」の場面ではいずれの集団の対でも有意な順位差は見られなかった。「協働者選択」の場面では、内集団は外集団、外集団への転向派、内集団への転向派のいずれに対しても、有意に順位が高かった。加えて、内集団への転向派もまた、外集団・外集団の転向派よりも有意に選択されやすかった。「援助者選択」の場面では、内集団が外集団への転向派に比べ有意に高く順位づけられた。

一方、多数派でも、「友人選択」($\chi^2(3, n=21)=10.20, p<.05$)、「協働者選択」($\chi^2(3, n=21)=21.90, p<.01$)、「援助者選択」($\chi^2(3, n=21)=26.89, p<.001$)のすべてで、各集団の選択順位に差が見られた。「友人選択」の場面では、内集団への転向派に比べ、内集団がより高く選択された。「協働者選択」の場面では、いずれの集団の対でも有意な順位差は見られなかった。「援助者選択」の場面では、内集団は外集団、外集団への転向派、内集団への転向派のいずれに対しても、有意に順位が高かった。加えて、内集団の転向派は、外集団の転向派に比べ有意に高く順位づけられた。

以上の結果をまとめると、一般に、内集団および内集団への転向派が選択されやすく、外集団および外集団への転向派は選択されにくかった。この傾向は、特に少数派で強かったといえる。これに対し、格差拡大条件の多数派で、選

択順位に差が見られたのは「援助者選択」の場面のみであり、明確な内集団びいきが示されなかった。

集団の優劣と正当性 集団の態度の優位性および主観的な正しさの平均評定値をそれぞれTable 10.10およびTable 10.11に示す。内集団サイズ×集団サイズ格差の2要因被験者間分散分析を行った。その結果、集団の優位性の認知では有意な主効果および交互作用は見られず、一貫して少数派より多数派のほうが優勢であると知覚されていた。しかし、集団の主観的正しさの評定では、内集団サイズの主効果が有意だった($F(1,79)=23.81, p<.001$)。すなわち、少数派も多数派も態度の優勢さにかかわらず、内集団の意見をどちらかといえば正しいと知覚していた。このことから、少数派が集団サイズの小ささから内集団を劣勢であると知覚しても、そのことが必ずしも直接的に内集団をネガティブにみなす(「正しくない」、「逸脱した」集団)ことには結びつかないことが示唆された。

Table 10.10

Perception of dominance of the group attitudes for the majority and minority

Condition	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Expanded	2.63	1.30	2.55	0.96
Reduced	3.05	1.07	2.86	1.50

1= very highly dominant to the majority attitudes, 7= very highly dominant to the minority attitudes

Table 10.11
 Perception of subjective correctness of the group attitudes
 for the majority and minority

Condition	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Expanded	4.53	0.91	3.68	0.95
Reduced	4.04	1.04	3.43	0.93

1= very strongly supposed to be correct to the majority attitudes,
 7= very strongly dominant to the minority attitudes

考 察

研究8の結果を見ると、「内集団—外集団への転向派」の分配では、格差拡大・縮小条件の少数派、および、格差縮小条件の多数派で、転向派に対する差別が見られ、格差拡大条件の多数派では見られなかった。これに対し、「内集団—内集団への転向派」の分配では、集団サイズ格差の変化にかかわらず、多数派で内集団への転向派を差別する行動が見られ、少数派では明確な差別は示されなかった。さらに、「外集団—内集団への転向派」間の分配では、格差拡大条件の多数派のみが、外集団に比べ内集団への転向派を有意に差別した。その一方で、格差縮小条件の少数派では、むしろ内集団への転向派をひいきする傾向が見られた。

格差拡大条件の結果は、「なぜ転向したのか」という解釈の仕方が、転向派に対する差別行動に大きな影響を与えていることを示唆している。すなわち、多

数派の態度は、より妥当だとみなされやすい価値観を提供し(Festinger, 1950)、同時に逸脱に対する脅威を引き起こす(Deutsch & Gerard, 1955)ことによって、多数派への同調圧力を生じさせる。これに対し、少数派の価値観は、支配的な価値観に異議を唱え認知的葛藤を引き起こし、ひいては真の態度変化(私的変化)を生み出すと考えられる(Moscovici, 1980)。そして、多数派への同調者である少数派から多数派への転向者—すなわち、少数派にとっては外集団への転向派であり、多数派にとっては内集団への転向派—は、周囲の状況に合わせて自分の立場を変化させる信頼のおけない人々とみなされ、強く差別されたと考えられる。一方、多数派から少数派への転向者—すなわち、少数派にとっては内集団への転向派であり、多数派にとっては外集団への転向派—は、自分の態度を真に変化させたのであり、明確に差別されることはなかったものと思われる。

一方、格差縮小条件では、転向派に対する解釈の相違に加え、少数派と多数派の勢力が拮抗したことが、集団間差別行動に影響を及ぼしたと考えられる。すなわち、多数派にとって、外集団への転向派は、多数派の勢力を弱め、自身の価値の正当性を脅かす存在と知覚される。それゆえに、外集団への転向派と内集団の分配において、少数派だけでなく多数派もまた、外集団への転向派を有意に差別した。また、少数派は、内集団への転向派に対し明確な差別を示さず、特に、外集団に比べむしろ内集団への転向派をひいきする行動も見られた。このことは、少数派が内集団の勢力の低さを意識しやすく、内集団への転向派を少数派の立場の好転に貢献した「仲間」として扱いやすかったためと考えられる。多数派も、外集団と比較するときには、内集団への転向派を明確に差別しなかった。以上より、集団サイズの格差が縮小することによって、「内集団・内集団の転向派」対「外集団・外集団への転向派」という現在の内集団—外集団の区分がより顕在化するようになるのではないかと思われる。

本研究の結果は、転向派をどのような存在としてとらえるかということが、少数派および多数派の集団間差別行動を理解するうえで重要であることを示したものであると思われる。ただし本研究では、少数派および多数派が転向派をどのように認知していたのかを直接測定していない。特に、本研究では、少数派と多数派の態度がどのようなものであるか実験者が明確に示したわけではなく、転向派もさまざまな意見を読んだうえで態度を変化したとしか教示していない。このような状況でも、「多数派であること」が表明される時点で、すでに多数派による同調圧力が生じると考えることができる。しかし、Moscovici(1976)によると、少数派が影響力を発揮するには、少数派が、(a)一貫性、(b)心的投資、(c)自律性、(d)堅固さ、などの行動様式を身につけている必要がある。言い換えると、少数派は、自身の立場を(a)一貫して、(b)熱心に、(c)自己の原理に基づき、(d)かたくなに表明することによって、多数派に対し影響力を発揮することができる。それゆえに、多数派から少数派への転向者が、何に基づいて少数派の影響力を受けたのかについて、本研究の結果からは明確に論じることができない。今後の研究では、転向派に対する認知の問題を直接的に検討し、少数派と多数派で、転向の方向によって、転向派に対する認知が異なるのか、さらに集団サイズの格差が変化することで、転向派に対する認知が変化するのかななどの疑問に答えていかなければならないであろう。

なお、研究7と比較して、本研究の少数派は、外集団への転向派を差別したのに対し、内集団への転向派に対し明確な差別を示さなかった、という結果の差異が見られる。これは、本研究が、少数派、多数派、および転向派の集団サイズを数値によって明確に被験者に教示したため、集団サイズおよび勢力の変化が被験者にとってより明示的であったことによるものと思われる。それゆえに、少数派は内集団の勢力の低さを意識しやすく、中でも格差縮小条件の少数派は、外集団を差別し内集団への転向派をひいきする行動がいくつかの指標で

見られたものと思われる。集団サイズが直接的に集団のもつ勢力を表したということは、集団サイズの格差の変化にかかわらず、少数派が多数派に比べ自らの集団を劣勢だと知覚していたことから明らかである。ただし、少数派が内集団を劣勢であると知覚することが、必ずしも直接的に内集団をネガティブにみなす(「正しくない」、「逸脱した」集団)ことには結びつかないことが示唆されている。すなわち、集団の態度の正しさの評定では、多数派だけでなく少数派も、ともに内集団の態度を正しいを知覚していたのであり、それゆえに、たとえ内集団の勢力が弱められたとき(格差拡大条件の少数派、および、格差縮小条件の少数派)でも、転向派に対し明確な内集団びいきが見られたと考えられる。

10.3 まとめ

研究7および研究8において、一般に転向派は少数派および多数派の双方から差別されることが明らかにされた。類似性の観点から言えば、転向派は内集団成員と外集団成員の中間的存在と考えられる。にもかかわらず、転向によって態度が類似した内集団への転向派は、内集団との比較において差別された。また、外集団と外集団への転向派を比較すると、類似性の観点からは(以前態度が同じであった)外集団への転向派のほうが近いと考えられる。しかし、少数派も多数派も、ともに外集団の転向派を差別した。以上より、社会的アイデンティティは、単なる個人間の類似性とは質的に異なることが示唆された。態度を変化させた転向派は、たとえ外集団から内集団に転向した内集団への転向派でも、集団の価値を脅かす存在として少数派多数派の双方から差別されることが明らかにされた。

また、集団の影響過程(Deutsch & Gerard, 1955)の観点から考えると、転向者が少数派と多数派のどちらに移動するかによって、転向という行為の解釈(原因帰属)の仕方が大きく異なる。そして、このような転向派に対する認知が、転向派に対する差別行動の程度に影響を及ぼすことが、集団サイズ格差の変化を明確に操作した研究8より示唆された。すなわち、外集団への転向派は、多数派にとっては、少数派の価値観を受け入れ自身の態度を真に変化させた人々であるため、差別行動の程度は弱いものだった。これに対し、少数派にとって、外集団への転向派は優位な多数派に同調した人たちとみなされ、内集団の価値を脅かすものとして強く差別された。一方、内集団への転向派は、少数派にとっては、自身の価値観を真に変化させた人々であり、明確な差別を示さなかった。しかし、多数派にとっては、周囲の状況に合わせて自分の立場を変化させる、信頼のおけない人々であると知覚されるため、強く差別された。このような結果は、集

団サイズの格差が拡大した状況で、明確に示された。特に、内集団への転向派は、外集団と比較されることでさえ、格差拡大条件の多数派から、明確に差別されたことが明らかにされた。

一方で、研究8の格差縮小条件の結果は、転向派に対する解釈の相違に加え、集団間の格差変化もまた集団間行動に影響を及ぼすことを明らかにした。すなわち、外集団への転向派は、多数派の勢力を弱め、自身の価値観の正当性を脅かす存在であるため、少数派も多数派も、ともに外集団への転向派を差別した。これに対し、内集団への転向派は、多数派から差別されたのに対し、少数派からはむしろひいきする傾向も見られた。集団サイズ格差が縮小した条件では現在の内集団—外集団の区分がより顕在化しやすいため、内集団への転向派を「仲間」として扱いやすかったのではないかと考えられる。このように、転向派の存在により、集団間の格差が変化することによって、少数派および多数派集団の集団間差別性が強く影響を受けることが示唆された。